

佐藤嗣信・忠信の誠忠を詠ず（松口月城）

義経の麾下の弟兄

忠節見るべし唯一誠

身を殺して盾と為る兄嗣信

遺烈千秋史を照らして明らかなり

主を護りて離れず弟忠信

其の武其の勇鬼神驚く

正気凛たり此の両将

汚さず東北武人の名

源平の戦記悲哀在り

寒燈繙き来たりて誰か情に耐えんや

義経麾下弟兄 忠節可見唯一誠
殺身為盾兄嗣信 遺烈千秋照史明
護主不離弟忠信 其武其勇鬼神驚
正気凛兮此両将 不汚東北武人名
源平戦記悲哀在 寒燈繙来誰耐情

解説 奥州藤原氏の家臣・佐藤基治の子で、奥州にいた義経が挙兵した源頼朝の陣に赴く際、藤原秀衡の命により嗣信・忠信兄弟は源義経の家来となり義経に随行。其の誠忠を述べた詩。

語釈 ※麾下||ある人に属してその指揮に従う者。部下。※一誠||※盾||防ぎ守る手段。※遺烈||後世にのこる立派な業績、功績。※千秋||長い年月。※史||歴史。※鬼神||天地万物の霊魂。また、神々。※正気||正しい気風。正しい意気。※凛||態度・容姿・声などが、きびしくひきしまっているさま。※戦記||戦いの記録。※悲哀||かなしくあわれなこと。また、そのさま。※寒燈||ものさびしい灯火。※繙||書物を開いて読む。

通釈 義経の部下のこの兄弟の忠誠は誠のみ。敵から襲撃されても、身を殺してまで義経の盾となる兄、嗣信。この異形は歴史に刻まれる事であろう。また、弟の忠信は義経を護り、決して離れることは無く、その武勇は鬼神をも驚かせる。この正気みなぎる両将は東北武人の名を汚すことは無い。源平の戦記は悲哀があり、灯火の基で書物を詠むと、悲しく哀れなことに心を痛めてしまいうのである。